文化

沈黙に向き合う

沖縄戦 聞き取り47年 〈85〉

石原 昌家

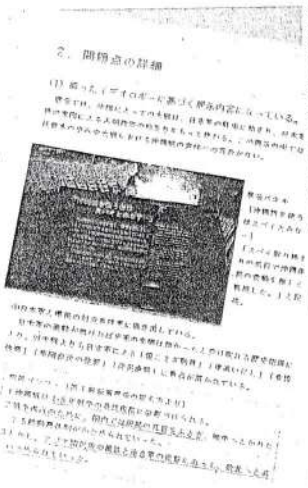
旧日本軍の加害、攻撃

全国の資料館、「反日」批判

平和祈念資料館問題⑱

私は数千人から戦争体験を聞き取りしてきても、体験者との間には埋めようのない断層があると常々、思っていた。一読者の電話で戦後76年たっていまでも、夜中に壕内の惨状にうなされるという苦しげな声に、沖縄戦体験者でない私との深い溝を痛感したものである。おりしも、その直後の5月30日、「沖縄戦・地上戦闘下のガマと住民」というテーマのもと、泊高校で平和特設授業の準備中でもあったので、その体験談を導入に授業を開始した。

前回、「ピースおおさか」で入手した冊子で沖縄の資料館問題を深掘りできた。その執筆のさなか、奈良県の読者・馬場彰子さんから「ピースおおさか」の展示問題で裁判を起こした原告を紹介したい、という手紙が届いた。さっそく、原告竹本昇氏から判決文資料の添付ファイルをいただいた。それは第二の資料館改ざん事件とあわせて、資料館問題シリーズの最後で触れていきたい。読者との応答でテーマが予期せず深まっていくようである。



沖縄県立平和祈念資料館の実態と問題点

1996年に自民党が作成した報告書の中でまとめた「沖縄県立平和祈念資料館の実態と問題点」。「偏ったイデオロギーに基づく展示内容」と指摘している

改ざんの前触れ

日本政府筋の報告書が発表されて以後、この調査などを基に右派ジャーナリズムなどによる資料館への「反日」攻撃、議会などでの質問などによる攻撃（同書142ページ）、そして「自治体による『反日資料館』の実態を明らかにする」ということで、「反日資料館」などという一般化していなかった表現を用いて、全国各地の平和博物館における旧日本軍の他国、他民族への加害にかかわる展示内容を激しく批判・攻撃している経緯が詳細に報告されていた。

沖縄県立平和祈念資料館も「偏ったイデオロギーに基づく展示内容」と批判されていたので（写真参照）、当該資料館から全国各地に貸し出された沖縄戦パネルなどがターゲットにされていた。

1998年、長崎県佐世保市の「佐世保空襲・平和資料展」で沖縄戦での住民の集団死の写真パネルが撤去されている。

また、鳥取県倉吉市では「夏休みの友」に掲載されている沖縄戦の写真をめぐって、市議会で問題視され、キャプションの書き換えを強いられるという事件（倉吉市在の人権問題研究家・池原正雄氏の情報提供）も発生していたようだ。

連載で既述のとおり、99年3月、稲嶺知事が新資料館は「反日的であってはならない」と県職員に指示したというのは、まさに全国の反日資料館攻撃に連なるものだったといえよう。

旧資料館の展示については、政府筋からの批判を受けていたが、実は県内の特に他府県の慰霊の塔碑文調査をしてきた人たちからも批判されてきた。その問題点は、「皇軍（日本軍）と住民との間で発生した沖縄戦の悲劇は天皇の軍隊が引き起こした」（天皇直属の軍事機関である大本営の船舶参謀だった馬淵氏がいう皇軍のなれの果て）にもかかわらず、その因果関係を示す史料展示がない、と指摘されていた。

新資料館の観点

旧資料館の開館から25年を経てリニューアルするにあたり、沖縄戦（体験）研究の深化、新史料の発見に加え、批判に応える視点で展示計画がすすめられた。

その主要点は①帝国日本の他国への侵略・加害の歴史②自国軍隊が自国民をスパイ視・虐殺した背景がわかる日本軍の間接的・直接的な史料を展示する③地上戦突入直前の昭和天皇の側近が意見具申した「近衛上奏文」の展示により天皇と沖縄戦のかかわりを理解できるようにする④沖縄全域における住民の体験証言や映像による体験証言⑤天皇メッセージや講和条約第三条の具体的史料を展示して沖縄が米軍占領下におかれてきた原点をしめす⑥米軍の基地から派生する事件、事故、人権抑圧⑦米軍の弾圧を超えて「日本復帰」を実現させたい住民の請願運動―などであった。

曲解正す地元紙

以上が新資料館のコンセプトの主要な内容だった。これまで沖縄地元2紙の新聞取材記者がスクープ記事として大々的に報じてきた県の「展示改ざん」内容は、この展示計画をことごとく真っ向から否定したり、内容を薄めたりするものであった。それは、全国での「反日資料館攻撃」と同一線上にあったことが「ピースおおさか」資料で明らかになったのである。

つまり、沖縄の新聞社は全国の反日資料館攻撃の一環であった沖縄県平和祈念資料館の展示改ざん事件で、「ペンは剣よりも強し」の精神で積極果敢な取材力によって、歴史の捏造、曲解を正してきた、と全国から高く評価された。

開館にむけて残された時間はわずかだった。私の記憶する限り、監修委員の間で意見をすり合わせるのに一番時間がかかったのは、平和祈念資料館の設立理念の扱いについてであった。

旧資料館が開館したのは、1975年であり、まだ沖縄戦体験の研究は緒についたところであった。それから25年たっているので、これまでの沖縄戦（体験）の研究の深化を当然ふまえるべきというのが私の見解だった。しかし、設立理念には触れるべきでないという意見もあり、何時間かけても意見は平行線のままだった。

旧資料館の設立理念のなかで、「沖縄戦の何よりの特徴は、軍人よりも一般住民の戦死者がはるかに上まわっていることにあり、その数は十万余におよびました。ある者は砲弾で吹き飛ばされ、ある者は追いつめられて自ら命を断ち、ある者は飢えとマラリアで倒れ、また、敗走する自国軍隊の犠牲にされる者もありました」という文言に手を加えるべきというのが、私の意見だった。

数千人の戦争体験者から聞き取りをしてきたものとして、そして無念の死を強いられた無数の戦争死没者のために、修正すべき文言が含まれていることに気づいたからである。それは、1984年に起こされた第三次家永教科書裁判の「沖縄戦に関する部分」の争点になった箇所でもあった。

（次回は7月後半掲載予定）